

「壁と卵」と死の影と 村上春樹

2009年2月15日イスラエル・エルサレム市
で

私は今日、小説家として、つまり嘘を紡ぐ専門家として、エルサレムにやってきました。嘘をつくのは小説家だけではありません。周知のとおり、政治家も嘘をつきますし、大統領、これは失敬ですが（会場、笑い）、外交官であれ軍人であれ、あらゆる場面で、ありとあらゆる嘘をつきます。中古車の販売員も、肉屋も、建設業者も。

しかしながら小説家というのは、嘘についても誰からも責められないという点で、他の職業とは違います。実際のところ、その嘘が、よりおもしろく、より大掛かりで、より独創的に作られたものであればあるほど、世間からも批評家からも、より多くの賞賛を受けるのです（会場、笑い）。

それはなぜか、という問いに対する私の答えを申しあげましょう。巧妙に嘘をつく、すな

わち、それが真実だと思われるようなフィクションを創作することによって、小説家は真実を新たなかたちで世間に示し、照らし出すのです。

ほとんどの場合、真実をありのままにとらえ、正確に描くということは実質的には不可能です。だからこそ、我々小説家は、隠れている真実の尻尾をつかみ、それを作り話の設定に転換し、フィクションの形態に置き換えようとするのです。

これを成し遂げるためには、まず、私たち自身の中で真実がどこにあるのか、それを明らかにしなければなりません。それはうまい嘘を作り上げるためになくはならない大事な資質です。

私は今日、偽りを述べるつもりはありません。できるだけ正直に語りたいと思います。一年の間で、嘘をつかない日というのは数えるほどしかないのですが、たまたま今日はその数少ない機会のひとつですので、正直に話させてください（会場、笑い）。

日本で非常に多くの方々から、エルサレム賞の授賞式にいくなど助言されました。行くなら著書の不買運動を行う、との警告を受けました。

彼らが私にそのように行った理由というのはもちろん、ガザ地区で激しい戦闘が繰り広げられているからです。国連の報告によると、封鎖されたガザの街では1000人を超える人々が犠牲になっており、その多くが子どもや老人など、武装していない一般の市民です。受賞の知らせを聞いてから何度も、私は自身に問いました。

このような時期に文学賞を受賞するためにイスラエルを訪問することは正しい行為なのだろうか？

私がイスラエルを訪問すると、衝突の片側だけを支持している、圧倒的な軍事力を使うことを選んだ国家を支援しているという印象を与えるのではないか？

そもそももちろん、私の本が不買運動にあつてしまってもいいのか、ということについても考えました。

熟慮を重ねた末、最終的にはここに来るとい
う決断を下しました。その理由のひとつは、
あまりにも多くの人が「行くな」と言ったか
らです。ほかの多くの小説家と同じで、人か
ら言われたこととまったく逆のことをやりた
くなるというところが、私にはあるのです(会
場、笑い、拍手)

小説家というのは特殊な人種で、自分の目で
見ていないもの、自分の手で触れていないも
のについては、どれも信じることができない。
だから今、私はこの場にいるのです。離れて
いようするのではなく、ここに来ることを
選びました。見ないようにするのではなく、
自分の目で見えることを選びました。だんまり
を決め込むより、ここで話すことを選びまし
た。

ですから、わたしのメッセージ・・・とても
個人的なメッセージを述べさせてください。
それは、わたしが小説を執筆しているときに、
つねに念頭に置いておくことです。

私は執筆しているとき、紙に言葉を書き、そ
れを壁に貼り付けるようなつもりでいたこと

はありません。そうではなく、言葉を自分自
身の壁に刻みつける行為なのです。つまり、
こういうことです。

ここに高くそびえる壁と、壁にぶつかると壊
れてしまう卵があるとすると、私はいつでも
卵の側に立つ。たとえばどんなに壁が正しくて、
卵が間違っているとしても。わたしはつねに、
卵に寄り添います。

ななが正しくて、ななが間違っているかにつ
いては、ほかの人が決めるでしょう。歴史が
証明するのかもしれない。しかし、もし小説
家がどんな理由であれ、壁の側に立った作品
を世に送り出したら、その作品にはどんな価
値があるのでしょうか？

壁と卵という比喻が意味するところは、場合
によっては、とても単純で明白です。爆弾だ
とか、戦車だとか、ロケットだとか、白リン
弾というものが、高くて固い壁だとしたら、
卵というのは、そうしたものによって潰され
てしまう、武器を持たない一般市民です。こ
れは比喻の持つ意味のひとつです。真実では
ありますが、しかしこれがすべてではありません

せん。もつと深い意味があるのです。

こういうふうには、考えてみてください。私た
ちは、一人ひとりが個性を持ち、脆い殻に覆
われたかけがえのない魂なのです。誰だつて
そうなのです。そして、程度の差こそあれ、
誰でも高くて固い壁と闘っている。システム
という名をもつ壁と。システムとは、本来は
私たちを守るために存在するものですが、時
には勝手に暴走し、私たちに他者を冷酷に、
より効率よくそしてシステムチックに殺すよ
うに仕向けるのです。

小説家が描き続けることに、ただ一つの正し
い理由があるとすれば、それは個の尊厳を擲
い上げ、その生に光を当てることです。物語
を作る目的は、私たちの生命を守るために警
告を発し、システムが私たちの精神をもつれ
させ、卑しめることを防ぐことなのです。

一人ひとりの精神が持つ個性を書くことによ
って、明らかにしようとして試み続けることこそ
が小説家の仕事だと、私は心から信じている
のです。だからこそ、真剣にフィクションを

作っているのです。

私の父は昨年、90歳で亡くなりました。教師を引退して、たまに僧侶の仕事をしていました。父は京都の大学院で学んでいた時に徴兵され、戦うために中国に派遣されました。

私自身は戦後生まれですが、子供の頃、父が毎朝食事の前に、自宅の小さな仏壇の前で深い祈りを捧げているのを見て育ちました。一度、父に聞いたことがあります。なぜ祈るか、と。すると父は言いました。戦場で命を失った人たちのために祈っているのだ、と。

敵、味方に関係なく、戦争で亡くなったすべての人たちのために祈っているのだ、と。仏壇に向かう父の後ろ姿を見ると、父の周りに死の影が漂うのが見えるような気がしました。そして父は、私が決して知りえることのない記憶を抱いて逝きました。しかし、父が胸にしまいこんでいた死の存在は、私の中に私自身の思い出として残されています。それは、私が父から受け継いだ数少ない、そしてもっとも大切なもののひとつです。

今日、私がみなさんに伝えたいことは一つで

す。それは、私たちの誰もが、国籍や人種や

宗教の違いを超えて、人間であるということに直面している、脆い卵だということです。

どう見たって、私たちには勝ち目はありません。壁はあまりにも高く、強く、そして冷たい。私たちに勝てる見込みがあるとすれば、互いの個性を、つまり自分自身も他者も互いにたつたひとりのかけがえのない精神を持つものであると認め合い、互いの心を結べば温かさを得られると信じることよってのみ、それは可能となるのです。

このことを少し立ち止まって考えてみてください。私たち一人ひとりに、しっかりと存在する精神が宿っているのです。そのようなものは、システムにはありません。私たちはシステムに搾取されてはいけません。システムを勝手に暴走させてはいけません。システムが私たちを作ったわけではありません。私たちがシステムを作ったのです。

私が伝えたかったのは以上です。(訳：原賀真

紀子、週刊朝日3月6日号)